発酵オーガニックだより

～伝統と美の青～

発酵の里こうざきの藍染め

藍染めは、日本の伝統的な染色技法の一つで、美しい深い青色を生み出すことで広く知られています。藍に含まれる色素は不溶性で、そのままでは染料にはなりませんが、微生物による発酵で水に溶ける染料となります。藍染めはこの染料を使用して、縄文時代から行われていたと言われています。丈夫さと美しさを兼ね備えた藍染めは江戸時代には特に盛んになり、庶民から上流階級まで広く愛されました。

神崎町では発酵を中心としたまちづくりを掲げ、藍染め講座を実施し、オリジナル手ぬぐいなどを作成。また、神崎発酵マラソンでは参加賞として藍染めＴシャツが参加者に配布されます。

今年度も藍染め講座を通し、発酵の里こうざきの発酵文化の一つである藍染めの魅力を発信します。

▲親子で染めた藍染めＴシャツ！

＼合併70周年記念　昭和100年で振り返る神崎今昔／

神崎小学校から神崎ふれあいプラザへ

現在ふれあいプラザがある場所は神崎小学校の旧校舎がありました。平成７年に新校舎の建築が始まり、平成８年には新校舎、平成９年には体育館が完成したことで神崎小学校は現在の場所に移ります。そして、旧校舎は取り壊され、文化・教育・福祉・健康づくりの拠点として新たに神崎ふれあいプラザの建設が始まります。神崎ふれあいプラザは平成13年に完成し、図書室・多目的ホール・保健福祉館などを備え、現在まで多くの町民のみなさまにご利用いただいています。

▲昭和20年代神崎ふれあいプラザ周辺

▲現在の神崎ふれあいプラザ周辺

～神崎歴史巡り～

神崎の自然　利根川

利根川は、日本を代表する一級河川のひとつであり、日本三大河川にも数えられます。千葉県北部を流れ、最終的に太平洋へと注ぐこの大河は、歴史を通じて地域の発展と深く結びついてきました。

かつて利根川は東京湾へと流れるルートが主流でしたが、江戸時代に増加する江戸の人口を支えるために、大規模な河川改修が行われ、流れを現在の形に変えました。この工事は、江戸の水運の大きな役割を果たし、利根川沿岸地域では酒造業や醸造業が発達していきます。

また、江戸時代後期には、頻発する水害への対策として様々な災害対策が講じられました。さらに明治時代に入ると流量の増加に対応するための整備が進み、現在のような大河川の姿が形成されました。

近年では、高規格堤防の整備が進められ、洪水や氾濫のリスクを抑える対策が強化されています。これにより、地域住民の安全を確保するとともに、持続可能な水利用が可能となっています。

▲神崎町を流れる利根川